2019

宮崎県 8

社会医療法人 善仁会

市民の森病院

Cover Story

高度かつ複雑な**リウマチ診療**の**質的向上**に病院が求めた**性能要件**は**極めて高かった**が、**WEB型電子カルテ**と**独自の機能**が応えた

1983年に開院した宮崎県宮崎市の市民の森病院は、当初よりリウマチ患者が多いことから、それに応えんと1989年に「リウマチセンター」を開設し、早30年を経た。同センターでは、高度なリウマチ診療を実施すると共に、多くの臨床研究や治験を実施してきているが、その実績は広く知られているところである。同院では、かねてより電子カルテ導入を目指してきたが、高度なリウマチ診療に対応できるシステムが無いことからその導入は2017年11月まで待つしかなかったという。しかし、その甲斐もあり、稼働し始めたシステムは、同院のすべての診療の大幅な質的向上を実現したという。同院のキーパーソンたる日髙利彦氏に話を聞いた。

WEB型電子カルテシステムを採用して リウマチ診療の支援機能を最大限に活用

Interview

社会医療法人善仁会
市民の森病院　副院長
膠原病・リウマチセンター所長
日髙利彦氏に聞く

社会医療法人善仁会 市民の森病院は、1983年3月に100床の病院として開設され、1988年には200床に増床。翌1989年にはリウマチセンターを設置するなど、開院当初よりリウマチに関する診療に力を入れてきたことで知られている。

同院副院長で、膠原病・リウマチセンター所長でもある日髙利彦氏は、リウマチ診療について、つぎのように話す。

「リウマチは、自己免疫異常からくる疾患ですが、30歳代から50歳代にかけて発症する傾向にあり、特に女性に多い疾患です。150人に1人が発症するとされ、宮崎県内にも人口比から考えて、5000～6000人程度の患者がいると推測されます。

リウマチ性疾患は、最も多い関節リウマチばかりでなく、皮膚や内蔵にも影響を及ぼす例もあり、症状が多岐にわたるのが特徴です。そのため、検査項目も多く、診察には時間がかかりますし、治療にかかる期間も長くなりがちです。一方で、近年の医療の進歩により、かつては〝難治〟とされていたリウマチも、ほぼ〝寛解〟に至るまで治療成果を上げることも可能になっています。がん等と同じように、リウマチも早期に、症状が軽微なうちに診療を開始すれば治療成績も良好になりますので、リウマチの疑いがある患者さんには早目の来院をしてほしいと、当院でも啓発活動に力を入れている最中です」

日髙利彦氏
（ひだか・としひこ）

1988年防衛医科大学校卒。同年より防衛医科大学校勤務。2003年より市民の森病院勤務、現在に至る。日本内科学会認定医、日本内科学会総合内科専門医、日本リウマチ学会専門医、日本アフェレシス学会専門医、日本リウマチ学会指導医。

同院におけるリウマチ診療の歴史について、日髙氏はつぎのように振り返る。

「当院は、開院当初、整形領域を中心に診療を展開していたのですが、難治性の疾病であったリウマチの患者さんも多く来院されていました。そのような折、薬の進歩によって内科系による治療が多くなってきたことから、手術と併せて集学的な体制を敷くべく『リウマチセンター』を病院開設6年目に新設したのです。

その後、善仁会は、2003年に内科系疾患を扱う市民の森病院と、外科系疾患を扱う善仁会病院と2つの病院に分かれましたが、リウマチセンターは市民の森病院内に置くこととしたのです。そのような経緯から、現在もリウマチ診療に関しては、手術を含む外科的な治療は善仁会病院で、薬剤を中心とした治療に関しては当院内のリウマチセンターで治療を行っています。もちろん、内科系の患者でも外科的治療が必要な場合もありますので、週に1度、善仁会病院から整形外科医が来て外来診療を担当していますし、逆に外科系の患者で内科的治療が必要な患者に対しては、私が同じく週に1度、善仁会病院で外来診療を行っています」

市民の森病院は、延床面積 9,249 ㎡（2,798 坪）の建物に、4 階建ての診療部と 7 階建ての健診部を有し、訪問看護ステーション一ツ葉を併設している

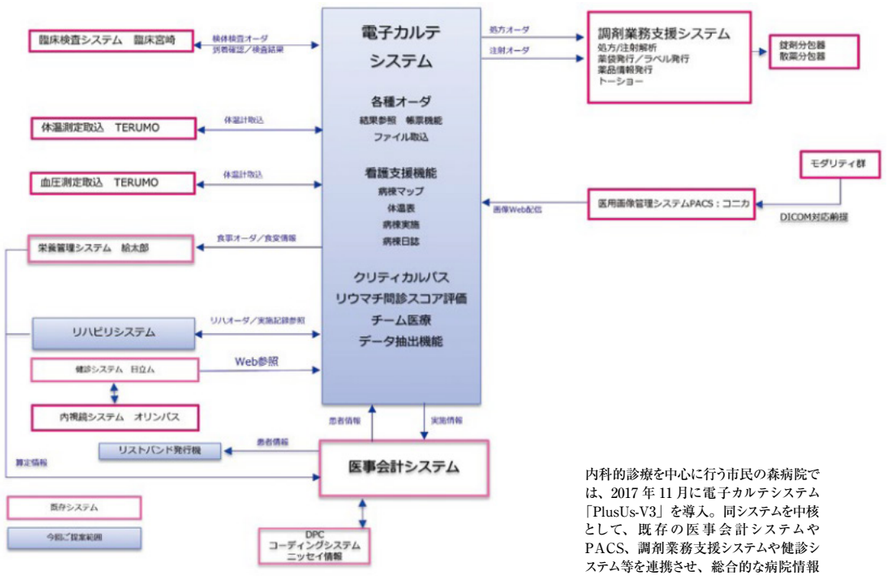
市民の森病院におけるリウマチ診療の体制について、日髙氏はつぎのように話す。

「リウマチ科には、常勤医として私を含む3名のリウマチ専門医と2名の非常勤医が勤務しているほか、日本リウマチ財団認定のリウマチケア看護師が1名、同じく認定薬剤師が2名、リハビリを担当するリウマチ専門の理学療法士が3名所属しており、チームによる医療を実施しています。当然、整形外科や神経内科といった他の診療科とも連携し、多職種・多診療科連携による総合的な診療を行っています。

なお、当院では、年間約1300人のリウマチ患者を診療しており、1日当たり40～50人の外来患者が来院されています。

リウマチ診療の特徴を挙げるならば、当センターはリウマチ学会認定教育施設であり、保険適応がある治療（各種薬物治療、生物学的製剤、白血球除去療法）は全て可能です。また、QOLの向上がリウマチ治療の目標の1つでもあることから、QOL維持のために骨破壊の進行防

市民の森病院　病院情報システム構成図



内科的診療を中心に行う市民の森病院では、2017 年 11 月に電子カルテシステム「PlusUs-V3」を導入。同システムを中核として、既存の医事会計システムやPACS、調剤業務支援システムや健診システム等を連携させ、総合的な病院情報システムを構築している

止に最大の関心を払っております。患者さんによって重症度・経過が異なり、適切な治療法の選択が必要であることなどから、患者さん1人ひとりに合わせて最も適当と思われる治療法を選択することが重要であり、当センターでもそれを重視し、また実践しています。

なお、臨床に関する治験も同時並行で常時7件ほど実施しているなど、リウマチ診療の発展にも尽力しています」

電子カルテシステム「PlusUs-V3」 WEB型故の高レスポンス性を発揮

市民の森病院は、2017年11月より電子カルテを中心とした病院情報システムの稼働を開始した。その中核となるシステムが、ソフトマックス製の電子カルテシステム「PlusUs-V3」である。

「PlusUs-V3」は、電子カルテ、オーダリング、看護支援が一体となったパッケージシステムである。診療に関するさまざまな情報を1つのデータベースに合理的に一元管理することで、スムーズな運用と情報の利活用を支援する。

また、同システムはWEBブラウザ上で作動するWEB型電子カルテシステムであり、院内LANに限定した運用から、複数施設間のネットワークを介しての運用まで、柔軟な稼働モデルを実現できる利点を持つ。さらに、ネットワークに掛かる通信の負担も少なく、レスポンス性能が優れている点も特徴である。

また、同社が提供する他の「PlusUsシリーズ」製品（医事会計・放射線情報管理・リハビリ支援・手術管理・物流管理・看護勤務管理等）を組み合わせることにより、コストパフォーマンスの高い総合的な病院情報システムを構築することができる。

同システムを導入することになった経緯について、日高氏はつぎのように話す。

「電子カルテ化以前は医事会計とオーダリングシステムのみの電子化でしたが、今後の医療の進展から考え、電子カルテ化は当法人理事長のかねてよりの方針でした。しかし、一般的な電子カルテシステムは、当院の主な診療であるリウマチ診療に応えられないものがほとんどです。

リウマチ診療では、患者さんの健康状態や関節の評価など、診療に用いるパラメータが多数あり、それらを基にして疾患活動性スコアDAS（disease activity score：ダス）などの評価を点数化する必要があります。リウマチの治療では、これらの評価を細かく丹念に行いながら治療方針を決め、それに合わせて薬の内容や量を微調整していくことが要求されるのです。

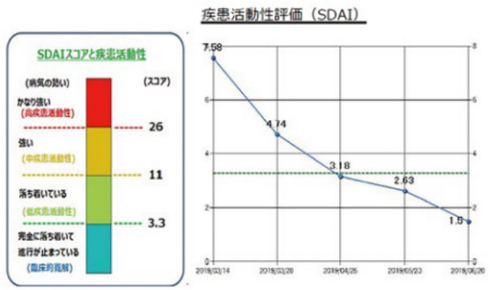
一般的な電子カルテシステムには、こうした機能が搭載されておらず、表計算ソフトやデータベースソフトを活用して、医療者自身が手入力および計算までを行わなければならず、大変な手間と労力が必要であり、当院でもそのような診療を行っていました。

今般のソフトマックス製電子カルテ導入は、このようなリウマチ診療に必要な機能を盛り込んだリウマチ診療支援システムを開発すると約束してくれたことが、採用する決め手となったのです」

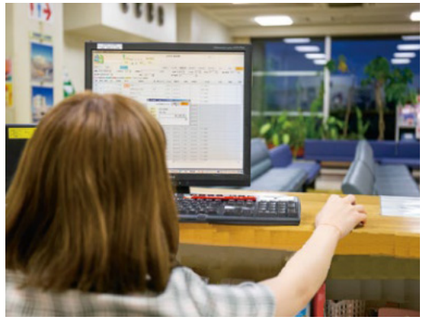
リウマチ診療支援システム

リウマチ支援機能の評価入力画面。関節リウマチにおける痛みや腫れ等、関節に関する評価を簡便に入力。SDAIやCDAIといった関節に関する活動性の評価を自動計算して電子カルテに自動で転記。従来、手間と労力が必要だった各種評価を簡便に実施することができる

リウマチ支援機能の時系列参照画面。リウマチに関する各種評価や検査結果等を事例列に表示。数値の変化を経時的に表示することで、疾病状況の変化をより客観的かつ具体的に表示することができ、薬剤の調整や治療方針の決定の際に役立てられている



疾病活動性評価（SDAI）の帳票出力画面。治療開始からの評価をグラフ化することで治療実態を具現化。同画面を出力し、患者に情報提供することで、治療の成果を患者自身が実感でき、診療に対するモチベーション維持や満足度向上に貢献している



市民の森病院では約130台の病院情報システム端末を設置。医事会計システム等、各部門システムと連携し、効率的な診療業務を実現している

リウマチ診療支援システム「PlusUs-カルテ」 各種機能評価への対応をサポート

ソフトマックス製電子カルテ「PlusUs-カルテ」のリウマチ診療支援システムは、シンプルな画面構成によって、入力業務の手間を省き、結果、高い操作性を提供しており、診療全般の業務をサポートする。また、カルテデータの2次利用も容易にできる。

電子カルテ「PlusUs-V3」で診察する日高利彦氏。「紙カルテと比べてリウマチ診療が大幅に効率化し、システムにはとても満足している」と話す

日高氏の求めるリウマチ患者の機能評価等のスコアリングや計算、表示等の機能については、導入まで半年間にわたり、病院側とベンダ間で入念な打ち合わせと準備作業を実施したという。稼働したシステムについて、日高氏はつぎのように評価している。

「シンプルな画面構成で見やすく、点数等の入力も簡単です。項目の評価を行うことで、計算結果は自動的に表示される他、電子カルテにも記録が自動で転送されます。また、システムでは初診時を起点として、経時的な変化を画面上に表示することもできています。リウマチの患者さんは、1ヵ所でも痛い箇所や状態が悪い箇所を見ると良くなっていないのではと感じる方が多いのですが、具体的な診療データの提示により治療成果挙を実感してもらえ、患者さんの治療に対するモチベーションの維持にもつながっています。

もちろん、当院スタッフからも、この機能に対する評価は高く、大学病院から派遣されてくる非常勤医師からも、リウマチに関する機能については、高い評価を得ています」

リウマチ診療を支援する機能を充実させたソフトマックス社の対応について、日高氏は高く評価している。

「導入決定から稼働開始まで半年間と短い期間でしたが、担当技術者には頻繁に通ってもらい、当院の要望を汲み取り、また具体化した良いシステムが構築できたと感謝しています。当院は電子カルテが初めてだったこともあり、その点も心配でしたが、トレーニング体制を含めた担当者の対応もよく、現場のスタッフからも高評価を得ています」

電子カルテ全体の有用性について、日高氏はつぎのように話す。

「紙カルテに比べて、データの検索や患者のカルテデータを探す作業が大幅に効率化されましたし、PACSとも連携していて、医用画像をカルテ画面に貼り付けることも容易です。リウマチ診療では、超音波検査を含め、画像検査を行うことも多いので、医用画像を簡便に扱えることは、診療上の大きなメリットであると感じています。

また、紙カルテだと起こりがちな記録漏れもなくなり、診療情報の質も良くなりました。医師毎に治療の質が大きく異なると病院としては困りますが、そのようなことを無くす上でも電子カルテ化は有意義だなと思います」

今後、日高氏はさらなるシステムの機能性向上に取り組みたいと話す。

「これでリウマチに関するシステムが完成したわけではありません。まだ、改良しなければならないところもあり、それらが改善されれば、さらに診療の質の向上につながるでしょう。例えば、身体機能の評価はリウマチ診療において重要な項目の1つですが、炎症反応を経時的に表示するなど、この領域についても可視化を進めたいと考えています」

社会医療法人善仁会 市民の森病院

市民の森病院は善仁会病院とともに、社会医療法人善仁会の医療部門を支える中核施設である。病床数は108床ながら、診療科目は13診療科を標榜し、さらにリウマチセンターや呼吸器センターを有する特色ある病院である。外来患者数は1日約160人を数え、その3分の1がリウマチ関連の患者である。2009年には通所リハビリテーションセンターを開設させ、地域のニーズに対しても積極的に対応している。

所 在 地：宮崎市大字塩路2783-37
許可病床数：108床（一般97床、地域包括ケア11床）
開 設 者：社会医療法人善仁会理事長 濱砂カヨ
管 理 者：院長　前田啓一